

昔むかし、あるところに、たいそうけちん坊な地主がいました。もとは大金持ちでしたが、あまりにけちん坊で、使用人たちにお金をはらわなかったので、みんな出て行ってしまいました。それで、土地も水路も、あれ果ててしまいました。

ある日のこと、ひとりの聖者がやって来て、地主がこまり果てているのを見て、いいました。

「わたしは、とうとい呪文を知っている。もしあなたが、その呪文を、三か月の間、昼も夜も唱え続ければ、あなたの前にバラモン鬼があらわれるだろう。そして、あなたの命令にしたがって働いてくれるだろう。バラモン鬼は、百人の使用人よりも役に立つはずじゃ」

地主は、聖者の足元にひれふして、すぐにその呪文を教えてくれるようにたのみました。

聖者は、地主を西に向いてすわらせ、呪文を教えました。地主は、聖者にたくさんのお礼をやって帰らせました。

地主は、三か月の間、昼も夜も呪文を唱え続けました。

四か月目の最初の日、地主の前に巨大なみにくいバラモン鬼があらわれました。バラモン鬼は、地主の足元にひれふして、かみナリのような声で、

「ご主人さま、わたしは何をしたらよろしいでしょうか」といいました。地主はびっくりして飛び上がりましたが、

「わしの召し使いになって、命令にしたがって働いてもらいたい」といいました。バラモン鬼は、

「わたしはそのためここに來たのです。何をしたらよろしいか教えてください」といいました。そして、「ただし、わたしはいつもやる仕事があればなりません。ひとつ仕事が終わったら、すぐにつきぎの仕事をいつけてください。一瞬たりともぶらぶらしていることはできないのです。わたしはそういうたちなのです。もしもあなたが仕事をあたえそこなったら、わたしはあなたをころして食わねばなりません」といいました。地主は、ここにこしました。してもらうべき仕事はいくらでもあつたからです。

地主は、バラモン鬼を、かれたため池に連れて行っていました。

「このため池を修理して水を入れてもらいたい。ヤシの木が二本しずむだけの深さにしてくれ」

「はい、ご主人さま」

バラモン鬼は、かしこまって、仕事に取りかかりました。ため池は、たて二マイル、横二マイルもの広さがあつたので、この仕事には何か月もかかるだろうと、地主は思いました。

地主は、ごきげんで家に帰って、ごちそうをたっぷり食べ、おかみさんと楽しくすごしました。おかみさんは、夫がこんなに陽気なのをここ何年も見たことがありませんでした。

夕方、とつぜんバラモン鬼があらわれて、

「ため池の仕事が終わりました」といいました。地主は、飛び上がってさげびました。

「なんだって。たった数時間であの仕事がぜんぶ終わっただって」

「はい、ご主人さま。つぎは何をしたらよろしいでしょうか」

「それじゃ、わしの土地の雑草と石をぜんぶ取りのぞいて、いつでもたがやせるようにしてくれ。何もかもすむまで帰って来てはいけないぞ」

「はい、ご主人さま」

バラモン鬼はそういつて、消えました。地主の土地は二十もの村に広がっていました。何年もだれひとりそこで働いた者はなく、一面に雑草が生いしげっていました。たとえバラモン鬼でも、この仕事には何か月もかかるだろうと、地主は思いました。

夜になって、地主が床にっこうとしていると、バラモン鬼があらわれました。

「土地の仕事が終わりました。ご主人さま」

地主はおどろき、仕事の速さにおそろしくなりましたが、急いでいいました。

「では、その土地をたがやして、種をまき、ため池から水をくんで来てかけるのだ」

「はい、ご主人さま」

バラモン鬼は消えました。地主は、これには少なくとも一週間はかかるだろうと思って、床につきました。

ところが、しばらくすると、

「種まきの仕事が終わりました。ご主人さま」と、バラモン鬼があらわれました。地主は、あわてふためきました。

こうして、地主はひと晩じゅう、新しい仕事をあたえては、また新しい仕事を考え続けました。

ひと晩の内に、雌牛たちは乳をしぼられて水浴びをすませ、新しい家が建てられ、世界じゅうからめずらしい木が運ばれて庭に植えられました。バラモン鬼は、ご主人の望みになれるにつれて、ますます早く仕事をしました。つかれることを知りませんでした。

朝までに、地主はつかれ果てていました。おびえきって、頭をかきむしって、さげびました。

「これ以上、あいつにやらせることを思いつけない。どうしたらいいだろう。わしが命令をやめたとたんに、あいつはわしをころすだろう。どうしたらいいだろう」

地主がうろたえているのを、おかみさんが見て、なぐさめました。

「勇気をなくしてはいけませんよ。あなたが今までにやってほしかったあらゆる事を思い出すんです。それをバラモン鬼にやらせなさい。ほんとうに仕事がなくなったら、わたしの所にバラモン鬼をおよこしなさい」

地主は、バラモン鬼にいいました。

「とりあえず、おまえの仕事をわしにぜんぶ見せてくれ」

バラモン鬼は、地主を背負って飛び立ちました。何マイルにもわたって、仕事は完全無欠でした。ため池は深く、きれいな水でいっぱいでした。二十の村に広がる土地は、草を取り、たがやし、種をまいてありました。雌牛たちは乳をしぼられ、あらわれていました。

新しい家が建てられ、家具がそなえられ、かざられていました。庭はあらゆる種類のめずらしい木でいっぱいでした。何もかも、ひと晩の内に行われていました。地主は、もうこれ以上やってほしい事は何もありませんでした。

バラモン鬼は、せっついていいました。

「ご主人さま、つぎは何をしたらよろしいでしょうか。いってください。やる事がなければ、わたしは、いらいらしてくるのです」

もうどうしようもなくなったとき、地主はおかみさんを思い出しました。

「おまえは、最高の召し使いだ。ところで、妻がおまえにちょっとやってもらいたい事があるのだ。妻の所に行ってみてくれ」

バラモン鬼が行ってしまうと、地主は、ため息をついてお祈りをささげました。そして、せわしないバラモン鬼の手にかかって、自分はじきに死んでしまうのだと思いました。

おかみさんは、バラモン鬼を見ると、自分の頭から長いカールした髪の毛を一本ぬいて、いいました。

「ほら、バラモン鬼。ちょっとやってもらいたい事があるのです。この髪の毛を持って行って、まっすぐにのばして持つて来てくださいな」

バラモン鬼はよろこんで髪の毛を受け取り、インドボダイジュの木に登ってえだに腰かけました。そして、巨大な太ももの上で髪の毛をのばし始めました。何度ものばしては、お日さまにかざして、まっすぐになったかどうかたしかめました。けれども、何度やってみても、髪の毛はねじれていました。何度も何度も失敗して、やっとある事を思いつきました。金細工師が針金を炉の火で熱してまっすぐになるまでたくのを見た事がありました。

夜になると、バラモン鬼は、金細工師の仕事場にしのびこみ、髪の毛を炉の火の中に入れました。たちまち髪の毛はちぢれてけむりになってしまいました。あとにいやなにおいが残りました。

「どうしよう。髪の毛を持って帰らなかったら、おかみさんは何というだろう」

つぎにどうしたらよいか分からなくて、バラモン鬼は絶望しました。そして、おかみさんがおそろしくてたまらなかったので、逃げ出して、二度とふたたびあらわれませんでした。

＊ 聖者 修行を積んだりつばな人。

＊ バラモン鬼 生きているときバラモンだった鬼。バラモンはお坊さんで、昔のインドでは一番位が高い。

＊ 金細工師 金や銀で食器や飾りを作る人。